

徳永直の会会報

第67号

追悼 木村先生・小山さん！

会長 高木陽助

昨年、九月と十二月に徳永直の会にとって大切な人を二人亡くした。一人は立命館大学名誉教授の木村一信氏であり、もう一人は南風堂マスター小山英史氏である。木村氏は若いころ熊本県立熊本女子大学（現熊本県立大学）に在職され、中村青史前会長たちと共に徳永直の研究をされた方でもある。「徳永直の会会報第六十号」で「徳永直の一九三三年以降」という論文を快く寄稿していただいた。小山氏は画廊喫茶「南風堂」のマスターであり、額縁商売のかたわら、「NPO法人くまもと文化振興会の副理事長」「八雲会の事務局」「徳永直の会会員」等々、絵画関係も含めて熊本県の文化を縁の下で支えていた方である。今でも南風堂に行けば一番奥の常席に静かに座っておられた姿が目につかぶ。私たちは大切な二人に突然別れを告げられ、どうしようもなく深い悲しみに襲われている。

徳永直は昭和二十年六月、二十年もつれ添った「最愛の妻トシヲに先立たれてしまう。戦後に書かれた徳永直の代表作の一つ『妻よねむれ』の中から、徳永直の深い悲しみの一部を紹介する。

目次

- ・「追悼 木村先生・小山さん！」高木陽助… p1
- ・「直研究の大切な人を失った」中村青史… p2
- ・「木村一信先生を偲ぶ」和田崇… p3
- ・「南風堂マスターよ安らかに」中村青史… p4
- ・文学散歩⑩『風』緒方宏章… p6
- ・平成二十七年年度会計中間報告、第三十九回「孟宗忌」案内他… p7

「お前が死んだなんて！ほんとに不思議な気がする。お前が死ぬ！そんなこと、ついこないだまで、おれは思ってたことさえなかったのだ。お前自身そうだったか知らぬけれど、口にするにはあつても、ほんとにそう思ったことは一度もなかった。朝から晩までけんかし、いがみあい、子供を産ませ、子供を産み、まるで女房が千人でもいるかのように、どっちへむいて「おい」とどなつても、空気のように、どこからでもこたえるお前があつた。それは千年も万年もまえからそうであつたように、千年も万年もそうであるだろう気がしていた。そのお前がいらない！ほんとにいない！いくら待っても、もういない！そう思いだすと、おれは今でも、夜中に寝床の上におきなおつてしまふんだ！」

「おれにはこの二三ヶ月の過去が、どうしてもなだらかにおもいかえすことが出来ない。一つの情景から他の一つの情景にうつるのに、おれは五体を逆さにして奈落におちこんだり、四肢をちぢめて虚空にとびあがらねばならぬような気がするのだ。」

（徳永直文学選集Ⅱ）より

「直研究の大切な人を失った」

前会長 中村青史

木村一信さんが死んだ。二〇一五年九月二六日のことであった。前一年一月二四日に、平川虎臣の文学について、山鹿市で井上智重さん司会のトークショウがあり、ご一緒だった。その夜は、かつての平川虎臣研究会の仲間たちと、木村夫妻を囲んでの懇親会があったが、その時ガンだと言っていた。が、まだそう早く亡くなる様子は見えなかった。

一九七三年に首藤基澄熊大教授が、在熊の日本近代文学研究者に呼び掛けて、熊本近代文学研究会を結成した。熊本県立女子大に着任早々の木村さんも参加していた。研究会の最初の研究対象に徳永直が選ばれた。そして一九七七年一月『徳永直研究』なる冊子を発行した。その創刊号編集後記に、木村さんも書いている。『太陽のない街』を通してのみ描いていた私の中の徳永直は、この僅かの間に急速に変化を遂げていったように思われる。「最初の記憶」「他人の中」といった自己の生い立ちに題材を得た短編や、「光をかかぐる人々」「妻よねむれ」といった長編に接していく



『光をかかぐる人々』

ちに、全く新たな作家に出会ったような感じすら抱くようになって」と。そして早くも「光をかかぐる人々」に注目した木村さんは、これを彼の初期論文の代表作として発表し、この論文は二〇〇八年二月発行の『不安に生きる文化誌—森鷗外から中上健次まで—』（双文社出版）という大著の中に「足場を求めて—徳永直『光をかかぐる人々』—」として再録されている。

徳永直の文学碑を熊本の地に建てるに及んで、まず作品を読んでもらおうと、『徳永直短編選集』（文庫本型）を作ることになり、その作品選びから編集等の作業にも木村さんは中心メンバーの一人として参加している。徳永直の顕彰事業にも大切な人であったが、立命館大学に転出されたのは熊本にとって残念の極みであった。

【木村一信氏略歴】

- ・昭和二十一（一九四六）年四月二十四日、福岡市生まれ。
- 関西学院大学文学部日本文学科卒。同大学院文学研究科博士課程単位取得退学。
- 一九七九年、熊本県立熊本女子大学助教授。
- 一九九一年、立命館大学文学部教授。
- 二〇〇〇年、立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部教授。
- 二〇〇五年、立命館大学文学部長。
- 二〇一〇年、立命館大学名誉教授。
- 二〇一四年、プール学院大学名誉教授。
- 二〇一五年、大阪成蹊短期大学学長。
- 二〇一五年、九月二六日、午後十一時三四分逝去。六九歳。

木村一信先生を偲ぶ

和田 崇

木村一信先生の思い出を振り返ることは、私にとって心苦しい。立命館大学の出身で、徳永直の研究者であると聞くと、誰もが木村先生と私が懇意であったのだらうと想像する。しかし、私にとって木村先生は近くて遠い存在であった。

徳永直の長編小説『光かかぐる人々』に、こんな一節がある。日本の近代印刷技術の祖である本木昌造について調べていた主人公の「私」が、本木研究の権威である三谷幸吉に出会うも、彼は病に伏していた。そこで、三谷は次のように「私」へ語りかける。

「遠慮要らんよ、歴史とか、研究とかいふもんはネ、すべてそんなもんさ、ああ、やつと探してたら相手は死にかかつてあるなんて、ぼくもそんなことを何度も経験したよ、こんどは俺の番といふわけだ、なアにたいしたこつちやないさ。」

この一節に感動した花田清輝は、「近代の擁護と超克」をはじめ、小説や批評で何度か右の箇所を引用している。「歴史とか、研究とかいふもん」は、ときにすれ違いを生みながら、ぎりぎりのところで継承されるものかもしれない。

三谷の「遠慮要らんよ」という言葉は、木村先生の面影とともに私の心に響いてくる。病床の三谷と出会った『光をかかぐる人々』の「私」に対し、同じ大学にいながら、たった一度しか木村先生の研究室を訪ねなかった私は、全く愚かたしかしいようがない。偉大な研究者を前に、遠慮などしている場合ではなかったのである。

このたった一度だけの研究室訪問の際、私は京都では入手が困難

であった『徳永直研究』全号と、徳永直の小特集を組んだ『方位』第五号を木村先生から拝借した。もう十年も前のことで記憶は定かでないが、去り際に先生は、「またいつでもおいで」とおっしゃった気がする。そして、その「また」を果たすことができなかった。

木村先生と疎遠になってしまった原因は、ひとえに私の消極性にある。そもそも、私の師匠（指導教授）は木村先生ではなかった。また、修士課程に在籍していた時、同じく徳永直を研究する先輩がおり、彼の指導教授が木村先生であった。指導教授の異なる二人の徳永直研究者は、お互いにお互いの師匠とコンタクトを取ることを遠慮した。彼は修士で大学院を去ったが、結局、この一年間の空白が、私を木村先生の研究室から遠ざけてしまったのだ。

こうして、木村先生とお話するのは授業時間のみとなったが、限られた機会でも、先生は私に有意義な助言をくださった。大学院に進学した当時、徳永の文献ばかりを追いかけていた私に、先生は小林多喜二と相対化する視点を持つよう指摘してくださった。その助言を受けて書くことができた「蟹工船の読めない労働者」という論文は、私が研究者として公に論文を発表した第一号となった。

現在、大学で教鞭を執る身となり、着任したばかりでゼミを担当していない（指導する学生がいない）にもかかわらず、私のもとへ積極的に研究の相談に来る学生が数名いる。彼らを前にすると、私は過去の自分が恥ずかしくてならない。意欲的な学生たちは、指導教授や他者への遠慮とは関係なく、純粋に「知」を探索しているのである。いつしか疎遠となった木村先生に対する無礼を償うため、目の前にいる学生たちへ自分の研究を継承していきたい。

した。会員獲得にも力を注いでくださっていた。

南風堂マスターは、徳永直の会だけでなく、多くの文化活動にも関係していた。熊本文化の新しい拠点となつている、『まもと文化振興会』の中心人物でもあった。この会には南風堂ママの働きも無視できない。

マスターが居なくなつて、まだ間が無いので、あまり感じないが、日が経つにつれて彼の空席は大きな虚無感となつて、ひしひしと迫ってくるに違いない。

喫茶店隣室も手離され、『さろん・ド・漱雲』の看板も喫茶店に同居することになった。だが熊本文化の偉大な一拠点としての南風堂は存続する。われわれの溜まり場は健在であり、マスターと共に諸活動を支えてきた頼もしいママは元気だ。徳永直の会も、会員を増やし、活動を活発化させることを、マスターも見守ってくれることだろう。



マスターの常席にて

【小山英史氏 南風堂マスター略歴】

- ・昭和十四（一九三九）年十一月三日、熊本市横手町に生まれる。
- ・一新小学校、西山中学校、県立済々黌高校卒。七六歳。
- ・高校卒業後は様々な職に就いた。出版社、お菓子営業のため県外に営業所をつくる仕事、魚河岸の仲買商（儲かったが最後は従業員の保証人になり倒産）、住宅関係の仕事、生け簀設置工事（顧客の不渡り手形でこれまた倒産）、最後はご存じの通り南風堂経営と縁の販売（「さろん・ド・漱雲」と同居）。
- ・明治時代にあこがれ、古風な考え方で、浅薄な現代に疑義を抱いていた。世の中の変換期に生まれていれば大事をなしたかもしれない。商売しても義理人情を重んじ、債権相手から取り立てが出来ず常に貸し倒れになった。（ママ談）

【南風堂ママの評】

- ・自分一人でも切り盛りしていたと思っていたが、ちよつとしたことでも相談すると、広い視野からのアドバイスが大いに役立つ。夫が居なくなつて改めて感じている。
- ・日頃は喧嘩ばかりしていたようだったが、その喧嘩相手が居なくなつた喪失感ですごく寂しい。
- ・年の差婚など全く感じなかった。頑固一徹で、単純、思いこみが激しく、自己の意見を曲げない。そのくせ妙に優しいところがある。岩代先生との剣道談義でムキになり、白川河畔で勝負しようという話になったのを、必死に止めたこともあった。
- ・思い出せば色々あつてきりが無い。断片的にあれこれ思い出し、懐かしくまた寂しい。いい人だった。

徳永直文学散歩⑩

緒方宏章

『風』



気象台跡

―坂があった。丘の崖肌をS字なりに、まがりくねった坂があった。

崖の上の丘のてっぺんに測候所があった。測候所の赤い三角旗は色が褪めていた。埃りつぽい塔の上で風車が気ぜわしく廻転しながら、くるッ、くるッと向きを変え。うすあおい空から鷲が一羽、石のように落ちてきて、それから風に煽られると、こんどは糸から風に煽られると、黄つぽい汚れたのちぎれた凧のようにフワリフワリ翻えりながら、黄つぽい汚れた雲の中に消えていった。

坂はいちんち、赫つぽい土埃りが、つむじ風で舞いたっていた。丘の向こうに、村あり町があつて、朝から晩まで、荷馬車が坂をくだつてきたり、また登つていたりした。荷馬車の多くは肥後平野の特産物、米や麦や粟やを積んで坂を降りてきた。ながいながい八丁坂を、馬共は前足をつつぱつて、汗で毛並がよれよれになった尻をちぢめながら、一と足ごとにギツクギツクと梶棒が泣いていた。ふかい轍の痕や、うずたかい馬糞や、千切れた草履やで、坂は

いつも汚れているのであつた。

坂の下には広場があつた。広場のむこうに停車場があつて、煤煙でくろくなつたホームの屋根があつた。屋根の両側は裸のホームで赤錆びた引込線路が見え、線路のむこうはまた、截りたつた丘の赫い崖肌がただかつていた。

風はまわりの丘の上から吹いてきて、広場でつむじをまいた。広場の周囲は小さい町ができていて、どこの軒さきでも撒き水があつた。運送店が沢山あつた。「マル通」とか、「マル八」とか、それぞれにペんキの剥げかかった看板があつて、腰のたかいスタンドのある店先から、広場を通過してゆく荷馬車の群れに大声でよびかけたり、駈けだしてきたりする人間がいた。……

(「徳永直文学選集」より)

一九〇二年に京町に移転した測候所は、二〇一一年に春日に移転した。熊本城に面した場所に、測候のための機材の一部が残されている。一八九一年に開業した池田駅は、一九〇一年に上熊本駅と改称され、今では新幹線の開通に伴い新駅舎となつている。一九一三年に竣工した旧駅舎は熊本市電の駅舎として隣に移築されている。往時を偲ぶ駅前風景は、ほとんど残されていない。



旧上熊本駅舎

2015年度会計報告(4月~12月)

収 入		支 出	
繰 越 金	86,922	事 務 費	1,298
会費(44人)	88,000	通 信 費	12,668
利 子	23	総会関連費	1,600
寄 付	2,860	碑前祭関係費	
		会報印刷費	
		熊本文化振興会団体会費	
収 入 合 計	177,782	支 出 合 計	15,566
		残 金	162,216

- * 2015年度の会計報告は、総会時に行います。
 * 2015年度会費未納の方は(2,000円)の納入をお願いします。
 2016年度会費を「孟宗忌」の当日、もしくは「総会」当日に、集めさせていただきます。
 または、「総会」後に振替用紙を送付しますので、お振り込みください。
 * 住所変更等がありましたら、下記までご連絡ください。

〒862-0955 熊本市中央区神水本町6-40 緒方 宏章

第三十九回「孟宗忌」のご案内

二〇一六年二月十三日(土) 午後一時より

第一部「碑前祭」・・・午後一時より(受付〇時半より)

場所…徳永直文学碑前(泰勝寺入り口)

- ① 開会
- ② 黙祷
- ③ 献酒
- ④ 献花
- ⑤ メッセージ披露
- ⑥ 経過報告
- ⑦ 諸連絡

第二部「徳永直作品朗読会」・・・午後二時半より

場所…くまもと文学・歴史館展示3

(旧熊本近代文学館 レストラン跡)

① 徳永直作品朗読会(約七〇分)

『飛行機小僧』(一九三七年||昭和十二年)

朗読…熊本朗読研究会

② 解説…元熊本大学教授・文学博士(前会長)

中 村 青 史 氏

第三部「懇親会」・・・午後五時半 ~ 午後八時(予定)

(会費:四〇〇〇円)

第三十八回「孟宗忌」の様子

二〇一五年二月十五日(日)



「孟宗忌」集合写真



「孟宗忌」献酒の様子



朗読会の様子



宮城からのメッセージ

「徳永直」ホームページのご案内

徳永直のホームページを開設しています。「徳永直の会」の内容や過去の会報一号から三〇号まで掲載しています。また、徳永直に関する書物・研究・記事等の紹介も行っています。「徳永直の会ホームページ」で検索してください。

現在、アクセス数が、累計三二〇〇回を超えました。会員の皆さまからのご意見・ご感想もお待ちしております。

また、HPの使用料等に関しては、会員の和田崇様のご厚意でご負担していただいています。

「徳永直の会ホームページ」<http://tokunagasunaonokai.org/>

新規会員募集

新規会員を募集しています。お知り合いの方に、入会のお誘いを願います。

また新規会員募集のためのアイデアがありましたら、お寄せください。

住所変更等の連絡のお願い

住所変更等がございましたら、左記までご連絡ください。

〒862-0955 熊本市中央区神水本町六一四〇 緒方 宏章